

フェリックス・ヴァロットンとアンチミスム

中村 周子 (成城大学)

19世紀末から20世紀前半にかけて主にフランスで活動した、スイス出身のフェリックス・ヴァロットン(Félix Edouard Vallotton, 1865-1925)は、その生涯において数多くの絵画作品を制作した。1890年代はナビ派の一員として装飾性と平面性に富んだ絵画と版画の制作に取り組み、1900年代以降は絵画を中心に、様々な画題を取り上げて幅広い制作活動を展開した。その中でも室内画は、彼が1890年代後半から1900年代に盛んに描き、その画業の中核を成したとも言える画題の一つであり、共にナビ派で活動した同時代のピエール・ボナール(1867-1947)やエドゥアール・ヴュイヤール(1868-1940)も非常に得意とした画題である。そのことによってボナールとヴュイヤールについては、室内における日常的な情景を親密に描き出して、「アンチミスト」と称されている。ところが、ヴァロットンの室内画に関しては、アンチミスト達の作品と極めて密接な関係が指摘されるにも関わらず、未だ十分な議論がなされていないように思われる。

本発表では、ボナールらに代表された「アンチミスト」の位置付け、つまり「アンチミスム」の概念がどのように成立して、捉えられたのかを確認し、ヴァロットンの絵画作品とアンチミスムの関連を考察したい。ヴァロットンはこの時期に、ナビ派や前衛的な文芸雑誌『ラ・ルヴュ・ブランシュ』周辺の人々と親交を深めたが、彼らとの交流は絵画作品、ことに室内画にも大いに反映された。アンチミストの代表格であるヴュイヤールとの友情は、しばしばお互いの作品の重要なテーマになっただけでなく、それぞれの絵画制作に多大な影響を及ぼしている。ここでは、その背景を彼らが交わした当時の書簡から探りたい。そのために、1973年から1975年にかけて刊行された『フェリックス・ヴァロットン：その生涯と作品に関する資料 Félix Vallotton : Documents pour une Biographie et pour l' Histoire d' une Œuvre』の一部を再検証する。さらに、ヴァロットンのこうした交流が多くの写真によって記録され、その写真が彼の作品のモチーフや画面構成の直接的な着想源になっていたことも注目に値する。19世紀末という時期、写真という技術はもはや目新しいものではなくなっていたし、ヴァロットンをはじめとする画家達にとって身近にある器械の一つであった。それゆえ、当時の画家たちの実生活が絵画作品に反映される時、最も有効な素材の一つとして写真が用いられたことは極めて自然なことだろう。ヴァロットンもその例外ではなく、例えば1899年の《赤い部屋、エトルタ》(シカゴ美術研究所)は、同年に彼自身によって撮影された、ほぼ同じ構図の写真が確認される。どちらでも室内で寛ぐ画家の妻を見ることができる。とはいえ、ここで注目すべきことは、彼にとっての室内画は単なる写真の再現にとどまるものではなかったことだ。

このような問題点を踏まえ、本発表では、当時のヴァロットンの状況を伝える書簡と写真資料を精査、考察することによって、彼の室内画が「アンチミスム」という観点からどのように理解されるのかということをも明らかにし、ひいてはヴァロットンの「アンチミスト」としての位置付けを試みる。